

「OR企業サロン」報告

創立30周年を期に、将来に向けてさらなる学会発展を積極的にめざすため、本学会の財政的基盤の大きな支えとなっている賛助会員各社を対象とした新たな試み「OR企業サロン」が発足した。本年度は6回の開催予定で、以下に報告する2回がすでに実施された。

- コーディネータ：松田武彦（産業能率大学学長）
- サブコーディネータ：斎藤嘉博（㈱日立製作所）
梅沢 豊（東京大学経済学部）
- 統一テーマ：「インテリジェントな経営をめざして」

第1回：

日時：6月10日 18:00～20:30 場所：学生会館

参加者：33名 司会：斎藤サブコーディネータ

概要：梅沢サブコーディネータから本サロンの趣旨説明が行なわれ、参加者の自己紹介を行なった。その後、サロンの基調をなす以下の講話が行なわれた。また、この講和に関して参加者からの質問、意見、感想等が寄せられ、交流が行なわれた。

松田武彦：「組織知能一人間知能と人工知能の結びつき」

組織知能は個々の人間の知能が組織の中で集積されたトータルな知的問題の処理能力で、経営情報学のよりどころとなるものである。それらは決められたことを確実に実行する當為知能、いまやっていることから飛び出して仕事の変革を考え、これを組織の中に定着させる革新知能、それにいままでなかったまったく新しい考え方を産み出す創造知能に分けることができる。わが国の企業は、今や外圧による革新から脱皮して、内部からの革新で力を伸ばす時で、そのためには急速に成長をとげつつある人工知能を組織の中にどう位置づけて活用するか、現在実施している仕事のやり方にもっとうまい方法はないかと機会損失の存在を明らかにしてくれるORを経営の中にどう役立たせるかを考え、革新知能と創造知能の強化を図ることが大切である。

第2回：

日時：7月8日 18:00～21:00 場所：学生会館

参加者：36名 司会：梅沢サブコーディネータ

概要：前回の基調講演を展開する各論の第1回として、松田コーディネータから下記の講話があった。さらに、茅野健ゲストスピーカから、数々の企業のマネジメントの体験にもとづいた企業のなかでの創造性についての興味深い講話があった。これらの講話に対して参加者からは、欧米と日本の創造性の違いについて、をはじめとし、所定の時間をオーバーするほど活発な質疑が行なわれた。

松田武彦：「問題発見のからくり」

組織にとって重要な問題を発見し、対処していくためにはまずその組織のあるべき「未来理想像」を策定しなくてはならない。その理想像は在来の延長でなく、創造力豊かなものでなければならない。さらにその理想像と現実とのズレこそが組織への脅威であって、脅威はビジネスチャンスに転じ得る絶好の機会として認知されなくてはならない。仕事の失敗には間違った行動をとる「作為の誤り」と、事を見逃す「不作為の誤り」がある。後者はいわゆる機会損失で、なかなか失敗としては認め難いから、それをどの程度犯しているかわかる情報システム（機会損失情報システム）が今後特に必要になる。

茅野 健（オーケン）：「企業における創造性」

すぐれたリーダーシップのある環境ではやる気さえあれば何でもできる（松下電産でのコストダウンの例）。さらに、日本人の創造性を考えるには欧米人にとっての（神）と日本人にとっての（家）という思想の違いを認識することが重要。欧米は神に対しての“個”が確立しているのに対して、日本では“個”より“家”が強く、創造的なことも個人としてではなくQCサークルのように集団として行なわれる場合が多い。今後の日本は国際的な卓抜した個人を育てる必要があり、「多くの人の言うことが正しいのではなく、優秀なリーダーシップがあり、それを周囲の人が認めるという土壌づくりが重要であり、それが真の創造性の発揮に結びついていく。（研究普及委員会）